

児童期における自己の変化についての 認識と予測および期待に関する研究

—児童期の発達研究Ⅱ—

日 下 正 一

I 問題と目的

すでに指摘したように(日下, 1989), ここ数年の研究動向だけを見ても, 乳幼児期や青年期と比べて児童期の発達研究はかなり少なく, その蓄積もそれほど進んでいない。本研究では, まず児童の発達の中でとくに中軸となるとされる自己意識(田中, 1983)に焦点を当てることとする。しかし, 従来の自己意識研究は, 臨床的または現象学的な観点からのものがほとんどで, しかもそれらは青年を対象としたものが多く, 乳幼児期や児童期の子どもを対象とした, 自己意識の発達という視点からの研究はごくわずかである(松田, 1983)。それゆえ, 自己意識の発達段階やそれらの段階間の移行のプロセスについてもまだ探索の段階にあるといえる(松田, 1986)。

守屋・森・平崎・坂上(1972)は, 11名の小学生児童の小1から小5までの作文を縦断的に分析し, ①自己の認識は他を媒介として可能となること, ②自己の認識ははじめは外面的なもの(行動の認識)にとどまるが, 次第に内面的なもの(意識内容)の認識が可能となること, ③自己の認識はまず現在の自己から始まり, 次いで過去の自己の認識が可能となり, その結果, 変化するものとしての自己を認識することができるようになること, ④自己の認識は個人としての他を媒介として始まり, 次第に集団としての他を媒介にして深まり, 集団の中の個としての自己の認識へと進むこ

と, を明らかにしている。

とくに③については, 過去の自己とは関係なく現在の自己を把握する段階から, 過去の自己についての明確な認識には至らないが, 「このごろ」, 「前に比べて」, 「今までより」といったことばを用いて現在の自己に生じている変化を認識する段階へと進み, 最後に現在の自己の認識の基準となった過去の自己について現在の自己を基準にして明確に認識する段階へと至るといふ。

このように, 現在の自己だけではなく, 過去から現在までに変化した自己についての意識, さらに将来において変化するであろう自己の予測は, まさに成長・発達の過程にある児童の自己意識を構成する重要な柱の1つになっていると思われる。

本研究の目的は, 第1に, 児童は過去から現在にかけての自己の変化をどのように認識するのか, また現在から将来にかけての自己の変化をどのように予測するのか, 第2に, 現在の自己をどのように認識するのか, そして第3に, 現在の自己の変化を期待するのかどうか, 期待するとすればどのような面についての変化であるか, を明らかにすることにある。

自己の変化の認識に関する研究は, ザゾ, B(1974)の論文「発達の力動性—発達についての表象を通しての, 子どもの自我価値の発生に関する研究—」にも見られる。この研究の中でザゾは, 「どの年齢で生活したいかを選択すること」, 「もっと大きくなりたいと思うこと」, 「すんでしまっ

た変化と期待している変化」について児童期の子どもに質問しているが、本研究に関係するものは第3のとりわけ「すんでしまった変化」に関する部分である。ザゾの結果によると、1年前の自分と比べて「大きく変わった」とする者は7歳で最も多いが、年齢が高くなるにつれて「少しだけ変わった」とする者の増加によってその数が減少するという。また、身体的変化(身長・体重・力)が年齢とともに減少する(7歳の68.8%から12歳の45.7%)のに対して、他人との関係(態度・行動)は年齢とともに増加する。さらに、8~10歳の頃には「学校での進歩」が増加し、10~12歳頃になると心理的成長の中の自律(身の処理能力)や成熟(自覚)が増加してくることを明らかにし、これらの結果の中に「身体的成長—学校での成長—心理的成長」という発達の系列を見だしている。

小学校児童に対してこれと同様の調査をおこなった都筑(1981)の研究では、「少し変わった」がどの学年でも約2/3見られ、「たくさん変わった」とする者は学年が上がるにつれて減少し、「変わらない」は高学年で若干多く見られた。変化の内容については、「的はずれた反応」が学年が高くなるにつれて確実に減少すること、全体では「学校での進歩」(29.9%)、「心理的成長」(16.9%)、「身体的変化」(15.7%)、「他人との関係」(11.6%)の順に多いこと、高学年になるにつれて「学校での進歩」、「心理的成長」が多くなる傾向にあり、「身体的変化」はザゾの結果とは異なりむしろ小3と小5で多いこと、さらに、「他人との関係」については低学年と高学年の間に大きな差が見られること、が明らかにされた。

しかし、これら2つの研究のいずれも1年前の自己と現在の自己との対比に基づく自己の変化を問題にしているだけで、それ以前の自己との比較、あるいは将来の自己の変化の予想についての質問はおこなっていない。また、カテゴリーによる区分での「身体的変化」は理解できるとしても、

「学校での進歩」と「心理的成長」といった区分の仕方については疑問が残る。

本研究では、自己の変化の認識と予測のほかに、現在の自己の認識と自己の変化の期待についても調査するが、現在の自己については、「自分のことをどんな子どもだと思ふか」というきわめて素朴な形での質問をおこない、さらに、「今のままで自分でいいと思うか、それともこうなれば(こう変われば)いいなあ、というところがあるか」、「それはどこで、なぜか」という質問によって、現在の自己の変化の期待についても明らかにしたい。

II 方法

1. 調査対象 長野市内の小学校児童1年から6年まで各学年2クラス、合計386名。内訳はTABLE 1に示す通り。

TABLE 1 調査対象者とその内訳(人数)

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
男子	34	33	23	38	27	37	192
女子	27	31	35	31	29	41	194
計	61	64	58	69	56	78	386

2. 調査手続き

以下に示す調査項目に沿って、個別に聞き取り(面接)調査を実施した。聞き取りは長野県短期大学幼児教育学科の学生18名がおこない、児童の回答はテープレコーダに録音された。なお、「聞き取り調査」の前に児童に対して次のような説明がなされた。「これから、いろいろな質問をします。10分くらいで終わります。テストではありませんので、当たり外れ(答えが正しいとか間違いということ)はありません。自分の思ったとおり、考えたとおりに答えて下さい。」児童ひとりあたりの調査所要時間は、10~15分であった。

3. 調査項目

A. 過去から現在までの自己の変化についての認識と将来の自己の変化についての予測

TABLE 2 カテゴリーの説明とその具体的な事例

- A. 身体・形態；体全体、身長や体重、体つき（体形）、手足の大きさ、顔の形・色、髪の毛の長さ・多さ、髪形、目の大きさ、声などの身体的または形態的な変化に関するもの。
 【事例】「背（身長）が伸びた（っている）」「体重が増えた（っている）」「少し太った（っている）」「手足が大きくなった（っている）」「顔が変わった（っている）」「髪の毛が伸びた（伸びている）」「目がちょっと大きくなった」など。
- B. 行動・態度；行動傾向や生活習慣、態度の変化に関するものすべてを含む。
 【事例】「指しゃぶりをしなくなった」「食べるのが速くなった」「あまり泣かなくなった（なる）」「お手伝いをするようになった（なる）」「けんかしなくなった」「発言するようになった」「しゃべり方が変わった」「本をたくさん読むようになる」「いろいろなところへひとりで行けるようになる」「早起きができるようになる」「おしゃれになる」など。
- C. 性格；性格一般についての変化に関するもの。
 【事例】「ちょっとわがままになった」「性格が変わった」「おしとやかになった」「明るくなった（なる）」「やさしくなった（なる）」「もっとおとなしくなる」「まじめになっている」「性格が暗くなっている」「積極的になる」など。
- D. 勉強・学習；頭の良さ、勉強や教科学習に関するもの。
 【事例】「頭がよくなった（なる）」「勉強ができるようになった（なる）」「勉強をたくさんするようになった（なる）」「勉強が難しくなった（なる）」「勉強ががんばっている」「字がうまく書けるようになった」「計算が速くできるようになった」「英語や数学を習うようになる」など。
- E. 学校生活；勉強・学習を除く、通学方法・時間、服装、クラス、先生、行事、委員、部活、図書館利用など学校生活全般にかかわるもの。
 【事例】「学校まで遠くなった（なる）」「服がかわっている」「学年が少ない」「（担任の）先生が変わった」「先生が教科ごとに変わる」「4、5、6年になると委員がある」「部活がある」「図書館にいけるようになった」など。
- F. 友達；友達関係に関するもの。
 【事例】「友達が増えた（る）」「友達と遊べるようになった（なる）」「友達ができなくなる」など。
- G. 遊び；遊びの形態、場所、時間、仲間など、遊びに関係するもの。
 【事例】「外であまり遊ばなくなった」「よく遊ぶようになった（なる）」「遊びが変わった」「遊び時間が少なくなる」「女の子だけと遊ぶようになる」。
- H. 仕事・労働・職業；仕事や労働、将来の職業に関するもの。
 【事例】「仕事をするようになる」「働いている」「会社に行っている」「幼稚園（保育園）の先生になっている」「サラリーマンになっている」など。
- I. 家事・育児；炊事、洗濯、赤ん坊や子どもの世話などに関するもの。
 【事例】「ご飯を自分で作っている」「お料理、洗濯をしている」「自分の子どもの世話をする」「結婚して赤ちゃんを産んで育てている」など。
- J. その他；いずれのカテゴリーにも入らないものや意味不明のもの。
- K. 変化なし；自己の変化がなかった（ない）とするもの。
 【事例】「そんなに変わっていないと思う」「とくに変わったところはない」「変わらない」など。
- L. 無回答・わからない；回答のないもの、「わからない」と答えたもの。

（注） A～G、J～Lは、すべての質問項目に共通のもの。H、Iは質問項目④「大人」にのみ特有なもの。

①「赤ちゃんのときと今とを比べると、〇〇くん（さん）はどこがどう違った（変わった）と思いますか。

②「幼稚園（保育所・保育園）のときと今とを比べると、〇〇くん（さん）はどこがどう違っている（変わった）と思いますか。」

③「〇年（ひとつ下の学年、ただし1年生は省略）のときと今とを比べると、〇〇くん（さん）はどこがどう違っている（変わった）と思いますか。」

④「〇年（ひとつ上の学年、ただし6年生は省略）になったら、〇〇くん（さん）は今とど

こがどう違っている(変わっている)と思いますか。」

- ⑤「中学生になったら、〇〇くん(さん)は今とどこがどう違っている(変わっている)と思いますか。」
- ⑥「高校生になったら、〇〇くん(さん)は今とどこがどう違っている(変わっている)と思いますか。」
- ⑦「おとなになったら、〇〇くん(さん)は今とどこがどう違っている(変わっている)と思いますか。」

B. 現在の自己の認識と自己の変化の期待

- ⑧「〇〇くん(さん)は、自分のことをどんな子どもだと思えますか。」
- ⑨「どうしてそう思うのですか。」
- ⑩「〇〇くん(さん)は今のままの自分でいいと思えますか、それともこうなれば(こう変われば)いいなあ、というところがありますか。」
- ⑪(後者と答えた児童へ)「それはどんなところで、どうなれば(変われば)いいと思えますか。」
- ⑫(どちらの児童にも)「それはどうしてですか。」

4. 調査期日・場所 1990年6月～7月。放課後に2教室で実施された。

III 結果と考察

1. 自己の変化についての認識と予測

上記の①～⑦の質問項目に対する児童の回答をTABLE 2に示すようなカテゴリーにしたがって分類した。なお、質問項目⑦(大人)の2つのカテゴリー(「仕事・労働・職業」と「家事・育児」)だけは他の質問項目のカテゴリーと異なるが、その他のカテゴリーはすべての質問項目に共通である。

カテゴリーによる分類にあたっては、1つの質

問項目に対して2つ以上のカテゴリーに関係する回答をしている場合には複数回答の扱いにした(ただし、ほとんどは1つのカテゴリーによる回答であった)。また、同じカテゴリー内の回答をいくつしていてもそれを1つと見なして処理をした(例えば、「身長が伸びて、体重が増えた」、「顔が変わって、髪も長くなった」といったケースではそれぞれ「身体・形態」のカテゴリー1つと数えられた)。

以上の手続きにしたがって学年ごとにその人数と%を示したものが、TABLE 3からTABLE 9までの一連の表である。小1の場合には「1つ下学年」と幼稚園とは重複するので、質問項目③は省略し、TABLE 5には質問項目②の結果を載せてある。同様に、小6にとって「1つ上の学年」と中学生とは重複するので、質問項目④は省略し、TABLE 6には質問項目⑥の結果を載せてある。

(1) 赤ん坊のときと現在との比較による自己の変化の認識については、TABLE 3から次のことがいえる。すなわち、全体では多い順に「身体・形態」(44.6%)、「行動・態度」(14.8%)、「勉強・学習」(11.9%)であり、児童の半数近くが身体的な変化によって自己の変化をとらえていることがわかる。「身体・形態」では体全体、身長の成長がほとんどであるが、それ以外に目立つのは「顔」についての言及である。学年差を見ると、小3で「身体・形態」が31.0%と他の学年によりも数値が低く、その分「行動・態度」が増えている(27.6%)。この「行動・態度」は小3を中心に中学年で高く、「勉強・学習」は学年が上がるにつれて増加する傾向にある。

(2) 幼稚園のときと現在との比較による自己の変化についての認識(TABLE 4)になると、どの学年でも「身体・形態」(全体で14.8%)よりも「勉強・学習」(全体で25.1%)の方が多くなるが、小3にあってはその数値が低く(17.2%)、「行動・態度」(14.8%)や「運動能力・体力」

児童期における自己の変化についての認識と予測および期待に関する研究

TABLE 3 赤ん坊のときと現在との比較による自己変化についての認識の内容

学年 人数	1年 (n=61)	2年 (n=64)	3年 (n=58)	4年 (n=69)	5年 (n=56)	6年 (n=78)	合計 (n=386)
身体または形態	29 (47.5)	28 (43.8)	18 (31.0)	31 (44.9)	25 (44.6)	41 (52.6)	172 (44.6)
行動または態度	7 (11.5)	8 (12.5)	16 (27.6)	13 (18.8)	9 (16.1)	4 (5.1)	57 (14.8)
運動能力・体力	2 (3.3)	6 (9.4)	4 (6.9)	7 (10.1)	5 (8.9)	2 (2.6)	26 (6.7)
性格	1 (1.6)	2 (3.1)	1 (1.7)	4 (5.8)	6 (10.7)	8 (10.3)	22 (5.7)
勉強・学習	2 (3.3)	7 (10.9)	6 (10.3)	9 (13.0)	8 (14.3)	14 (17.8)	46 (11.9)
学校生活	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
友達	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (3.4)	1 (1.4)	1 (1.8)	1 (1.3)	5 (1.3)
遊び	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.4)	3 (5.4)	1 (1.3)	5 (1.3)
その他	1 (1.6)	1 (1.6)	2 (3.4)	1 (1.4)	0 (0.0)	1 (1.3)	6 (1.6)
変化なし	5 (8.2)	2 (3.1)	6 (10.3)	2 (2.9)	5 (8.9)	7 (9.0)	27 (7.0)
無回答・わからない	16 (26.2)	12 (18.8)	8 (13.8)	9 (13.0)	7 (12.5)	9 (11.5)	61 (15.8)

TABLE 4 幼稚園のときと現在との比較による自己変化についての認識の内容

学年 人数	1年 (n=61)	2年 (n=64)	3年 (n=58)	4年 (n=69)	5年 (n=56)	6年 (n=78)	合計 (n=386)
身体または形態	9 (14.8)	12 (18.8)	6 (10.3)	11 (15.9)	8 (14.3)	11 (14.1)	57 (14.8)
行動または態度	2 (3.3)	7 (10.9)	8 (14.0)	5 (7.2)	7 (12.5)	8 (10.3)	37 (9.6)
運動能力・体力	1 (1.6)	4 (6.3)	9 (15.5)	4 (5.8)	6 (10.7)	5 (6.4)	29 (7.5)
性格	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (6.9)	4 (5.8)	6 (10.7)	13 (16.7)	27 (7.0)
勉強・学習	17 (27.9)	17 (26.6)	10 (17.2)	21 (30.4)	15 (26.8)	17 (21.8)	97 (25.1)
学校生活	6 (9.8)	2 (3.1)	1 (1.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.0)	10 (2.6)
友達	1 (1.6)	1 (1.6)	6 (10.3)	4 (5.8)	2 (3.6)	4 (5.1)	18 (4.7)
遊び	1 (1.6)	4 (6.3)	3 (5.2)	7 (10.1)	4 (7.1)	4 (5.1)	23 (5.9)
その他	1 (1.6)	1 (1.6)	1 (1.7)	2 (2.9)	3 (5.4)	3 (3.8)	11 (2.8)
変化なし	9 (14.8)	6 (9.3)	4 (6.9)	4 (5.8)	3 (5.4)	9 (11.5)	35 (9.1)
無回答・わからない	14 (22.9)	11 (17.2)	7 (12.1)	7 (10.1)	6 (10.7)	8 (10.3)	53 (13.7)

TABLE 5 1つ下の学年と現在との比較による自己変化についての認識の内容

学年 人数	1年 (n=61)	2年 (n=64)	3年 (n=58)	4年 (n=69)	5年 (n=56)	6年 (n=78)	合計 (n=386)
身体または形態	9 (14.8)	11 (17.2)	3 (5.2)	9 (13.0)	3 (5.4)	7 (9.0)	42 (10.9)
行動または態度	2 (3.3)	8 (12.5)	6 (10.3)	3 (4.3)	9 (16.1)	9 (11.5)	37 (9.6)
運動能力・体力	1 (1.6)	5 (7.8)	3 (5.2)	4 (5.8)	3 (5.4)	8 (10.3)	24 (6.2)
性格	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.7)	2 (2.9)	3 (5.4)	3 (3.8)	9 (2.3)
勉強・学習	17 (27.9)	15 (23.4)	17 (29.3)	19 (27.5)	15 (26.8)	15 (19.2)	98 (25.4)
学校生活	6 (9.8)	2 (3.1)	6 (10.3)	3 (4.3)	0 (0.0)	3 (3.8)	20 (5.2)
友達	1 (1.6)	2 (3.1)	3 (5.2)	5 (7.2)	2 (3.6)	2 (2.6)	15 (3.9)
遊び	1 (1.6)	1 (1.6)	4 (6.9)	0 (0.0)	1 (1.4)	1 (1.3)	8 (2.1)
その他	1 (1.6)	1 (1.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (0.5)
変化なし	9 (14.8)	8 (12.5)	11 (19.0)	16 (23.2)	19 (33.9)	24 (30.8)	87 (22.5)
無回答・わからない	14 (22.9)	11 (17.2)	9 (15.5)	9 (13.0)	4 (7.1)	11 (14.1)	58 (15.0)

TABLE 6 1つ上の学年になったときの自己変化についての予測の内容

学年 人数	1年 (n=61)	2年 (n=64)	3年 (n=58)	4年 (n=69)	5年 (n=56)	6年 (n=78)	合計 (n=386)
身体または形態	16 (26.2)	15 (23.4)	7 (12.1)	12 (17.4)	12 (21.4)	10 (12.8)	72 (18.7)
行動または態度	2 (3.3)	5 (7.8)	2 (3.4)	7 (10.1)	15 (26.8)	6 (7.7)	37 (9.6)
運動能力・体力	2 (3.3)	9 (14.1)	8 (13.8)	9 (13.0)	2 (3.6)	4 (5.1)	34 (8.8)
性格	0 (0.0)	3 (4.7)	2 (3.4)	3 (4.3)	3 (5.4)	8 (10.3)	19 (4.9)
勉強・学習	9 (14.8)	17 (26.6)	13 (22.4)	15 (21.7)	14 (25.0)	26 (33.3)	94 (24.4)
学校生活	3 (4.9)	2 (3.1)	2 (3.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	12 (15.4)	19 (4.9)
友達	0 (1.6)	1 (1.6)	2 (3.4)	4 (5.8)	2 (3.6)	2 (2.6)	11 (2.8)
遊び	0 (0.0)	1 (1.6)	1 (1.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.6)	4 (1.0)
その他	1 (1.6)	0 (0.0)	1 (1.7)	2 (2.9)	1 (1.8)	0 (0.0)	5 (1.3)
変化なし	3 (4.9)	4 (6.3)	6 (10.3)	6 (8.7)	3 (5.4)	3 (3.8)	25 (6.5)
無回答・わからない	25 (22.9)	9 (17.2)	15 (15.5)	13 (13.0)	12 (7.1)	9 (10.3)	83 (21.5)

TABLE 7 中学生になったときの自己変化についての予想の内容

学年 人数	1年 (n=61)	2年 (n=64)	3年 (n=58)	4年 (n=69)	5年 (n=56)	6年 (n=78)	合計 (n=386)
身体または形態	18 (29.5)	18 (28.1)	15 (25.9)	14 (20.3)	9 (16.1)	10 (12.8)	84 (21.8)
行動または態度	2 (3.3)	6 (9.4)	3 (5.2)	6 (8.7)	6 (10.7)	6 (7.7)	29 (7.5)
運動能力・体力	0 (0.0)	4 (6.3)	3 (5.2)	3 (4.3)	3 (5.2)	4 (5.1)	17 (4.4)
性格	1 (1.6)	3 (4.7)	3 (5.2)	5 (7.2)	4 (7.1)	8 (10.3)	24 (6.2)
勉強・学習	13 (21.3)	10 (15.6)	15 (25.9)	20 (29.0)	12 (21.4)	26 (33.3)	96 (24.9)
学校生活	5 (8.2)	6 (9.4)	5 (8.6)	5 (7.2)	8 (14.3)	12 (15.4)	41 (10.6)
友達	1 (1.6)	2 (3.1)	2 (3.4)	1 (1.4)	3 (5.4)	2 (2.6)	11 (2.8)
遊び	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.9)	2 (3.6)	2 (2.6)	6 (1.6)
その他	2 (3.3)	1 (1.6)	1 (1.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (1.0)
変化なし	1 (1.6)	0 (0.0)	1 (1.7)	2 (2.9)	2 (3.6)	3 (3.8)	9 (2.3)
無回答・わからない	19 (31.1)	15 (23.4)	15 (25.9)	14 (20.3)	9 (16.1)	9 (11.5)	81 (21.0)

TABLE 8 高校生になったときの自己変化についての予想の内容

学年 人数	1年 (n=61)	2年 (n=64)	3年 (n=58)	4年 (n=69)	5年 (n=56)	6年 (n=78)	合計 (n=386)
身体または形態	19 (31.4)	11 (17.2)	13 (22.4)	12 (17.4)	13 (23.2)	10 (12.8)	78 (20.2)
行動または態度	4 (6.6)	7 (10.9)	8 (13.8)	6 (8.7)	9 (16.1)	10 (12.8)	44 (11.4)
運動能力・体力	1 (1.6)	6 (9.4)	3 (5.2)	3 (4.3)	4 (7.1)	2 (2.7)	19 (4.9)
性格	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (4.3)	3 (5.4)	4 (5.1)	10 (2.6)
勉強・学習	5 (8.2)	11 (17.2)	12 (20.7)	20 (29.0)	12 (21.4)	15 (19.2)	75 (19.4)
学校生活	2 (3.3)	4 (6.3)	4 (6.9)	5 (7.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	15 (3.9)
友達	1 (1.6)	2 (3.1)	1 (1.7)	1 (1.4)	2 (3.6)	3 (3.8)	10 (2.6)
遊び	0 (0.0)	1 (1.6)	0 (0.0)	2 (2.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (0.8)
その他	2 (3.3)	2 (3.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.7)	6 (1.6)
変化なし	1 (1.6)	0 (0.0)	4 (6.9)	1 (1.4)	5 (8.9)	2 (2.6)	13 (3.4)
無回答・わからない	27 (44.3)	22 (34.4)	18 (31.0)	18 (26.1)	9 (16.1)	30 (38.5)	124 (32.1)

TABLE 9 大人になったときの自己の変化についての予想の内容

学年 人数	1年 (n=61)	2年 (n=64)	3年 (n=58)	4年 (n=69)	5年 (n=56)	6年 (n=78)	合計 (n=386)
身体または形態	16 (26.2)	14 (21.9)	6 (10.3)	12 (17.4)	5 (8.9)	15 (19.2)	68 (17.6)
行動または態度	4 (6.6)	3 (4.7)	4 (6.9)	10 (14.5)	11 (19.6)	7 (9.0)	39 (10.1)
運動能力・体力	0 (0.0)	2 (3.1)	2 (3.4)	3 (5.2)	1 (1.8)	0 (0.0)	8 (2.1)
性格	1 (1.6)	0 (0.0)	1 (1.7)	3 (5.2)	6 (10.7)	12 (15.4)	23 (6.0)
勉強・学習	1 (1.6)	6 (9.4)	5 (8.6)	5 (7.2)	5 (8.9)	4 (5.1)	26 (6.7)
遊び	0 (0.0)	1 (1.6)	0 (0.0)	1 (1.4)	0 (0.0)	1 (1.3)	3 (0.8)
仕事・労働・職業	11 (18.0)	13 (20.3)	14 (24.1)	17 (24.6)	16 (28.6)	23 (29.5)	94 (24.4)
家事・育児	5 (8.2)	8 (12.5)	5 (8.6)	2 (2.9)	6 (10.7)	2 (2.6)	28 (7.3)
その他	4 (6.6)	1 (1.6)	1 (1.7)	3 (4.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (2.3)
変化なし	1 (1.6)	0 (0.0)	3 (5.2)	1 (1.4)	1 (1.8)	2 (2.6)	8 (2.1)
無回答・わからない	18 (29.5)	16 (25.0)	19 (32.8)	14 (20.3)	11 (19.6)	16 (20.5)	94 (24.4)

(15.5%)、「友達」(10.3%)に分散している。他の学年と比べて小6では「性格」が16.7%と高い値になっている。

(3) 1つ下の学年と現在との比較による自己の変化についての認識 (TABLE 5) についても、「幼稚園」と同様に「勉強・学習」面に自己の変化を求める傾向が強いが、とくに小5と小6の児童のそれぞれ33.9%、30.8%が「変化なし」と答えていることにより、これは他の学年、さらには他の質問項目と比較してもかなり高い数値であ

る。

(4) 1つ上の学年になったときの自己の変化についての予測 (TABLE 6) については、全体では「勉強・学習」(24.4%)と「身体・形態」(18.7%)が多く挙げられているが、「勉強・学習」については小1で値が低く(14.8%)、小6では33.3%と高いが、小2～小5では大きな差はない。また、小5で「行動・態度」(26.8%)が高く、小2～小5で「運動能力・体力」が若干多く見られる(14.1%、13.8%、13.0%)。

TABLE 10 現在の自己の認識

理由項目	学年	1年 (n=61)	2年 (n=64)	3年 (n=58)	4年 (n=69)	5年 (n=56)	6年 (n=78)	計 (n=386)
性 格		19	27	21	32	31	43	173
「普通の子ども」		6	7	5	9	9	8	44
身 体・形 態		4	2	3	3	1	1	14
勉 強		2	5	4	9	4	6	30
運 動・音 楽		0	3	5	2	1	2	13
遊 び・けんか等		1	7	5	5	4	6	28
そ の 他		6	1	5	1	0	2	15
N	R	23	12	10	8	6	10	69

(5) 中学生になったときの自己の変化についての予測 (TABLE 7) においても、全体では「1つ上の学年」と同様に「勉強・学習」(24.9%)と「身体・形態」(21.8%)の変化を挙げる児童が多く見られるが、ここでは高学年ほど「身体・形態」が少なくなる傾向が見られる。また、小5、小6では「学校生活」上の変化が比較的高い値となっている(それぞれ、14.3%、15.4%)。

(6) 高校生になったときの自己の変化についての予想 (TABLE 8) になると、まず「無回答・わからない」が全体で32.1%を占め、低学年になるにつれてその%が高くなる傾向がある(小1では44.3%ととりわけ高い。ただし、小6だけはその例外で38.5%という高い値を示している)。次に目立つのは「身体・形態」(20.2%)と「勉強・学習」(19.4%)であり、「行動・態度」もここでは多少高い値(11.4%)になっている。さらに、小1では「身体・形態」が多く(31.4%)、「勉強・学習」は少なくなっている(8.2%)。

(7) 大人になったときの自己の変化についての予想 (TABLE 9) については、全体で「無回答・わからない」(24.4%)、「仕事・労働・職業」(24.4%)、「身体・形態」(17.6%)が多く、それに「行動・態度」(10.1%)と続いている。「仕事・労働・職業」は学年が上がるにつれて増加し、「行動・態度」は小4、小5でそれぞれ14.5%、19.6%と高い値を示し、また「性格」は小5、小6になると増えてくる(10.7%、15.4%)。

2. 現在の自己についての認識

TABLE 10は、「自分のことをどんな子どもだと思うか」「それはどうしてか」(質問項目⑥、⑦)について8つのカテゴリーに分類し、学年ごとにその人数を示したものである。なお、それぞれのカテゴリーの事例は、次の通りである。性格;「明るい子」、「わがままな子」、「のんびりしている子」など。「普通の子ども」;「普通だと思う」、「普通の子どもだと思う」など。身体・形態;「背が小さい子」、「体が太っている子」など。勉強;「頭の良くない子」、「勉強できない子」など。運動・音楽;「スポーツができる子」、「足が速い子」、「ピアノの上手な子」など。遊び・けんか等;「遊ぶのが好きな子」、「けんかが強い子」など。その他;以上のカテゴリー以外のもの。N R; 無回答、「わからない」。

TABLE 10から、まず第1に、学年が高くなるにつれて「性格」による自己認識が増加することがわかる。すなわち、小1で19名(31.1%)であるが、小5、小6になると50%を越えている(それぞれ、55.4%、55.1%)。なお、性格を表すことばとして比較的多いのは、「いい—悪い」(全体で24名)、「元気な」(21名)、「明るい—暗い」(16名)、「わがままな」(11名)、「いたずらっ子」(6名)、「おもしろい」(6名)、「やさしい—やさしくない」(6名)といったものである。

第2に注目すべき点は、「普通(の子ども)」と

答える児童がどの学年においても5～9名見られ、全体で44名にも達するということである。「普通の子ども」の理由を見ると、「普段なんか怒るときもあるし、やさしいときもある」や「いたずらもするし、いいこともするから」、「いいところもないし、悪いところもないから」、「足とか口とか(が普通)」、「みんなと同じだから」、「頭の良さがみんなと同じだから」、「いいとも思わないし、悪いとも思わない」、「みんなと同じことをしたり、違うことをしたりするから」、「友達と仲よくしているし、勉強もちゃんとしているから」、「なんとなく」、「わからない」というように、性格から勉強、行動までさまざまである(本来ならば、理由によって他のカテゴリーに分類すべきところではあるが、分類不可能なものもあること、どの学年にも現れていることから、これを1つのカテゴリーとして独立させることにした)。

第3に、「勉強」や「遊び・けんか等」によって自己を規定する子どもが多少見られる(全体で30名、28名)が、「身体・形態」による自己の認識はその半分以下にすぎない(全体でも14名)ことにも注目したい。

3. 自己の変化に対する期待

(1) 自己の変化に対する期待の有無

「今のままの自分でいいか、それともこうなれば(変われば)いいな、というところがあるか」という質問(質問項目⑩)に対する回答結果について学年ごとに示したものが FIG. 1 である。この図から明らかなように、小1と小2では「今のままの自分でいい」という児童の方が多い(それぞれ、52.5%、57.8%)が、小3以降は「こうなれば(変われば)いいというところがある」と答える児童が「今のままの自分でいい」をかなり上回っている(69.0%、65.2%、71.4%、65.4%)。このことから、小3以降になると自己の変化に対する期待が大きいことがわかる。

(2) 自己の変化に対する期待の内容について

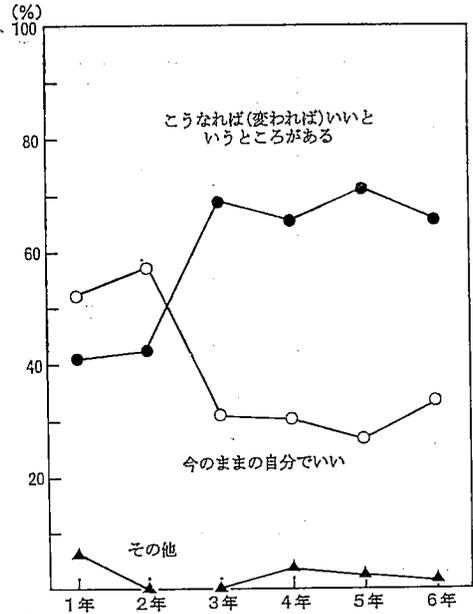


FIG. 1 自己の変化の期待の有無

次に、自己の変化に対する期待の内容については、TABLE 2と同様のカテゴリーにしたがって分類した。ただし、期待の内容なので児童の実際の回答は、「～になりたい」、「～したい」、「～になればいい」といった形のものになっている。例えば、「身体・形態」(「もっと背が高くなりしたい」、「背がもっと伸びればいい」)、「行動・態度」(「けんかをしないようにしたい」、「誰にでもあいさつをしたい」)、「性格」(「もっと明るくなればいい」、「やさしくなりたい」)、「勉強・学習」(「もっと勉強ができるようになりたい」、「友達」(「友達と仲よくなりしたい」))、などである。

TABLE 11は分類の結果を示したものである。まず全体で見ると、「性格」(25.0%)と「勉強・学習」(24.1%)、続いて「行動・態度」(16.7%)、「身体・形態」(10.1%)が自己変容の期待の内容として多く挙げられていることがわかる。次に学年差を見ると、「性格」と「勉強・学習」は学年が高くなるにつれてその割合が大きくなる。ただし、小6になると「勉強・学習」(15.7%)は減少し、その分「性格」(41.2%)が急激に増加し、「行動・態度」(21.6%)も増えている。小1と小

TABLE 11 自己の変化の期待の内容

項目	学年 人数	1年 (n=25)	2年 (n=27)	3年 (n=40)	4年 (n=45)	5年 (n=40)	6年 (n=51)	合計 (n=228)
身体または形態		6 (24.0)	2 (7.4)	3 (7.5)	5 (11.1)	3 (7.5)	4 (7.8)	23 (10.1)
行動または態度		1 (4.0)	3 (11.1)	11 (27.5)	8 (17.8)	4 (10.0)	11 (21.6)	38 (16.7)
運動能力・体力		0 (0.0)	4 (14.8)	3 (7.5)	4 (8.9)	5 (12.5)	2 (3.9)	18 (7.9)
性格		4 (16.0)	3 (11.1)	8 (20.0)	10 (22.2)	11 (27.5)	21 (41.2)	57 (25.0)
勉強・学習		4 (16.0)	6 (22.2)	10 (25.0)	12 (26.7)	15 (37.5)	8 (15.7)	55 (24.1)
友達		1 (4.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.2)	1 (2.5)	1 (2.0)	4 (1.8)
その他		6 (24.0)	9 (33.3)	3 (7.5)	4 (8.9)	1 (2.5)	2 (3.9)	25 (11.0)
無回答・わからない		3 (12.0)	0 (0.0)	2 (5.0)	1 (2.2)	0 (0.0)	2 (3.9)	8 (3.5)

TABLE 12 現在の自己の肯定の理由

理由項目	学年	1年 (n=32)	2年 (n=37)	3年 (n=18)	4年 (n=21)	5年 (n=15)	6年 (n=26)	計 (n=149)
勉強		6	6	2	4	1	1	20
友達		2	1	1	5	1	2	12
遊び		0	1	1	1	0	0	3
楽しい		2	1	0	2	1	1	6
性格		0	0	3	1	1	5	10
手伝い		0	1	1	1	0	0	3
身体		2	1	0	0	0	0	3
たんなる肯定		3	11	5	1	7	8	35
その他		2	5	0	6	2	4	19
N	R	15	10	6	2	3	5	41

(注) 複数回答があるので、総計は調査対象者数を上回る。

TABLE 13 現在の自己の肯定の型

型	学年	1年 (n=32)	2年 (n=37)	3年 (n=18)	4年 (n=21)	5年 (n=15)	6年 (n=26)	計 (n=149)
A. 積極的評価型		8	8	4	11	4	10	45
B. 消極的肯定型		6	13	7	5	6	10	47
C. 将来不安型		2	4	1	2	2	0	11
D. その他の型		1	2	0	1	0	1	5
E. NR型		15	10	6	2	3	5	41

2で「その他」が多く見られるが、これは「ロボットになればよかった」、「机がかわってほしい」、「まだ一人部屋がないから、一人部屋がほしい」、「お金持ちになりたい」というような的の外れた回答が含まれていることによる。

(3) 自己の変化を期待しない理由

質問項目⑧に対して「今のままの自分でいい」と答えた者について、その理由（質問項目⑩）を10のカテゴリーに分類した。そのカテゴリーと事

例は次の通りである。勉強；「勉強できるから」「勉強があまり難しくないから」。友達；「友達がたくさんいるから」、遊び；「今は遊べるから」。楽しい；「今のままの方が楽しいから」、性格；「性格が変わりたくない」、「ずうっと明るく、やさしいままでいたい」、手伝い；「手伝いをするいい子だから」、身体；「小さくてかわいいから」、たんなる肯定；「なんとなく」、「別に変わりたいところがない」、「このままでいい」、その他；ど

の категорияにも入らないもの、NR；無回答、「わからない」。

その結果を示したのが TABLE 12 である。全体を合計した人数で最も多いのは「NR」と「たんなる肯定」で、それぞれ41名、35名であるが、これらはいずれも積極的なあるいは明確な理由とはいえない。とくに小1では「NR」が多く(15/32名)、小2では「たんなる肯定」(11/37)と「NR」(10/37)が多く見られる。また小5、小6で「たんなる肯定」が多い(それぞれ7/15名、8/26名)。「今のままでいい」の明確な理由として最も多いのは「勉強」、「友達」、「性格」であり、「勉強」は低学年に、「性格」は小6に、そして「友達」は小4に多く見られる。

次に、「今のままの自分でいい」とする者、つまり現在の自己を肯定する者について、その理由を TABLE 13 に示すような別の角度から分析してみた。表中の型は、次のようなものである。A；現在の自己を積極的に評価するもの(「楽しいから」、「友達がいっぱいいるから」など)、B；現在の自己を消極的に肯定するもの(「別に変わりたいところがないから」、「なんとなく」「このくらいがちょうどいいから」など)、C；将来に不安があるために現在の自己を肯定するもの(「大きくなると難しい勉強が出てくるから」、「大きくなると友達がバラバラになるから」など)、D；その他分類不可能のもの、E；「わからない」、無回答のもの、である。

TABLE 13 を見ると、まずA型とB型がそれぞれ全体の1/3を占めているが、C、D、E型も現在の自己を積極的に評価していないという点ではB型と同様なので、これらを合計すると、A型と非A型の比率は1:2となり、「今のままの自分でいい」とする者が必ずしも積極的な理由でそのように答えているわけではないことが明らかとなる。学年別には、小4でA型が多く(11/21名)、小1、小2ではE型が多いという結果が出ている。

IV 全体的考察

本研究の目的は、児童期における自己意識の発達を、自己の変化の認識と予測、自己の認識および自己変化の期待という観点から明らかにすることにあつた。以下、得られた結果について全体的な考察をしたいと思う。

1. 自己の変化についての認識と予測

自己変化の認識にせよ、自己変化の予測にせよ、小学生児童が学年に関係なく自己の変化としてまず着目するのは、身体的・形態的な変化と勉強・学習上の変化の2つであつた。これら以外にも、行動・態度面や運動能力・体力面の変化、性格の変化にも目を向けるが、全体としては数が少ない。ただし、赤ん坊のときとの比較における自己変化については、身体的・形態的な変化を挙げる児童が約45%とくに多く、行動・態度の変化が勉強・学習上の変化をわずかに上回っている。また、大人になったときの自己の変化については、当然のごとく勉強・学習よりも仕事・労働・職業について言及するものが最も多く(24.4%)、次いで身体・形態、行動・態度の順であつた。

しかしながら、本研究の結果からは、自己の変化についての認識と予測に関して、性格面の変化を挙げるの者の数は少なく、高学年(とくに小6)で多少増えるという傾向は見られたが、フランスの児童を対象とした研究結果に基づいてザゾが指摘したような「身体的成長—学校での進歩—心理的成長」という明確な発達系列を見いだすことはできなかった。カテゴリー化の違いということも考えられるので、ザゾと同様のカテゴリーによる分類も敢えて試みたが、ザゾのような結果を得ることはできなかった。

赤ん坊と大人はさておき、幼稚園から小学生、そして中学生、高校生に至るまでの過去の自己変化の認識や将来の自己変化の予測に関して、どの

学年の児童も自己の変化をとりわけ勉強・学習面の変化によってとらえようとする傾向が強いのは、なぜであろうか。現在のわが国の小学生児童のおかれている教育的状況がこうした認識に反映されているからではなからうか。これと類似する指摘は、ザゾの力動過程検査を用いて児童や青年の自己意識の発達にアプローチした都筑(1981b)や塚野(1987)によってもすでになされている。

次に、質問の仕方とカテゴリ化が同じではないので厳密な比較は不可能であるが、1つ下の学年との比較における自己の変化についてのみザゾ(1974)、都筑(1981)の結果と本研究の結果とを比較してみると、まず、ザゾの研究では学年とともに身体的変化が減少し、勉強・学習(学校での進歩)が逆に増加するという結果が出ているが、都筑の研究では勉強・学習が学年とともに増加するものの、身体的変化は低学年よりもむしろ3年と5年で多く見られる。それに対して、本研究では勉強・学習、身体的変化ともに全学年でほぼ平均化しており、ザゾの結果とも都筑の結果とも異なる傾向を見せている。

しかし、1年前の自分と比べて変わらないと答えるものが学年とともに増加するという結果は、ザゾや都筑の結果と一致する。本研究ではこうした反応が小5、小6において30%以上も見られた。こうした傾向は他の質問項目では見られないものであり、小学校高学年になればなるほど、1年間の自己の変化が意識しにくいことを示していると思われる。

2. 現在の自己の認識と自己変化の期待について

以上見たように、自己変化の認識と予測については目立った学年差はなく、そのほとんどが勉強・学習と身体的変化によるものであった。しかし、現在の自己の認識となると、児童期の子どもたちの多くは身体・形態や勉強・学習面よりも性格によって自己を認識する。そして、こうした性格による自己認識は学年が高くなるにつれて強ま

る(TABLE 10 参照)が、この傾向は幼児期からの変化の傾向(日下他, 1990)の延長上にあるものであり、守屋ら(1972)をはじめとする先行研究が明らかにしてきた、外面的なものから内面的なものへの自己認識の発達方向を示していると見ることができる。

自己認識の結果で注目すべきことは、自分のことを「普通の子ども」と答える児童がどの学年にも共通して1割(5~9名)ほど見られたということである。その理由としては、他の子どもと比べて普通とするもの(「みんなと同じだから」、「頭の良さがみんなと同じだから」)から、自分の中での相反する2つの行動傾向または性格特徴の相殺の結果として普通とするもの(「怒るときもあるし、やさしいときもある」、「いたずらもするし、いいこともするから」)、「なんとなく」、「わからない」というものまでさまざまであるが、こうした理由の中に自己の位置を相対化しようとする試みを見てとることができる。

自己変化の期待については、FIG. 1 が示すように、小1と小2では今の自己を肯定する者が多いのに対して、小3以降ではそれが逆転して自己の変化を希望する者が多くなる。おそらく、小3頃から自己の認識が深まり、自己の変容の要求が高まることがその大きな原因であろうと思われるが、この時期の児童の内部で何が起きているか、についての詳細な検討は、今後の課題である。

自分のどんなところを変えたいか、については、性格と学習がそれぞれ全体の約1/4を占め、学年とともにその割合が増加するが、小6では学習が激減し、性格と行動・態度が急増する(TABLE 11)。小6のこうした結果は、この学年の児童が青年期の入り口にさしかかり、とりわけ自己の内面へと強い関心を向けはじめたことによると考えられる。

一方、「今のままの自分でよい」とする者についてみると、その約2/3はそれほど明確な理由をもっていないことが明らかとなった(TABLE

12)。残りの1/3の子どもたちがその理由として多く挙げているのは、勉強と友達、性格である。しかし、自己肯定の理由のうち現在の自己を積極的に評価しているのは約1/3であり、残りの2/3は「別に変わりたいところがない」、「なんとなく」といった消極的なタイプや、「大きくなると勉強が難しくなる」、「大きくなると友達がバラバラになる」といった理由で現状を肯定する「将来不安型」、そして「無回答・わからない」によって占められている (TABLE 13)。これらのことから、現在の自己の肯定とはいっても必ずしも現在の自己の特定のある側面を積極的に評価しているとは限らず、多くは消極的なものに終わっているといえる。

最後に、これまで考察してきたことを整理すると、以前と比べて自分のどこがどう変わったか、については勉強・学習面の変化と身体的変化を挙げ、自分はどういう子どもか、については性格によって特徴づけ、さらにどこが変わりたいか、については性格面と学習面と答える。これらの結果は、児童期の子どもにおいては、学年とともに性格といった内面的な特質に目を向けるようになるが、その側面から自己の変化を把握することは少なく、むしろ勉強・学習面での変化や身体的変化に着目しやすいこと、しかし、自己変化の希望となると、身体的なものよりは性格や勉強・学習の面に集中すること、を示している。

こうした結果は、児童期の自己意識とその発達をとらえる際には、すでに先行研究が指摘してきたような、外面的なものから内面的なものへという発達方向を認めながらも、常にその中に現代のわが国の小学生児童のおかれている勉強・学習中心の教育状況という要因を組み込んでいく必要があることを示唆している。今後、児童期の自己認識の発達研究にとって必要とされるのは、そうした視点にたちながら、自己認識を具体的にとらえる

試みであり、守屋ら (1972) のような作文、あるいは日記の分析などによって、とりわけ自己の毎日の生活や行動と自己意識とがどのような関係にあるのか、を具体的に明らかにすることであろう。

引用文献

- 日下正一 1989 「九・十歳の壁」論と発達心理学的課題—児童期の発達研究 I— 長野県短期大学紀要 44 95—104
- 日下正一・須々木百合子・青木倫子・風間節子・小林孝子・坂口やちよ・千村直子 1990 幼児期における自己およびまわりの人々についての認識の発達 長野県短期大学紀要 45 121—132
- 松田 惺 1983 自己意識 三宅・村井・波多野・高橋編 児童心理学ハンドブック 金子書房 640—664
- 松田 惺 1986 自己意識の発達に関する最近の研究 教育心理学年報 25 54—63
- 守屋慶子・森 万岐子・平崎慶明・坂上典子 1972 児童の自己認識の発達 教育心理学研究 20 205—215
- 田中孝彦 1983 子育ての思想 新日本出版社
- 塚野州一 1987 子どもにおける時間軸上の自己意識の発達 教育心理学研究 35 266—270
- 都筑 学 1981 a 小学生における自己意識の発達 日本心理学会第45回大会発表論文集 520
- 都筑 学 1981 b 発達の力動過程検査を用いた児童の自己意識の分析 教育心理学研究 29 245—251
- ザゾ, B. 久保田正人・塚野州一訳 1974 発展の力動過程 ザゾ, R. 編 学童の生長と発達 明治図書 210—252 Zazzo, B. 1969 Le dynamisme évolutif chez l'enfant. In Zazzo, R. (ed.) Des garçons de 6 à 12 ans. Paris : P. U. F.

(付記)

本研究の調査の実施にあたっては、長野市立湯谷小学校の協力をいただきました。校長先生、教頭先生をはじめ、各クラスの担任の先生方、そして児童生徒の皆さんに心からお礼を申し上げます。また、実際の調査にあたった長野県短期大学幼児教育学科の学生の皆さんにも心からの感謝を申し上げます。